

2018年度 須磨学園高等学校 入学試験問題

国語 出題の意図

全体について

2018年度の問題作成にあたり、須磨学園のスローガンである「to be myself,...」に基づき、自分と周囲（世界、社会、他者）との関わりをテーマに据え、従来の方針や様式を継承しつつ、受験者の学力を検出できるよう配慮した。また、2020年より始まる新入試に対する基礎的な適応力を視野に入れつつ、高等学校での学習活動を行うための「知識」「読解力」「表現力」といった基礎学力をどれだけバランス良く兼備しているかを判定できる試験問題を目指した。

以下は、問題作成担当として、留意した点である。

- (1) 問題は、昨年同様、4問構成とし、「小問集合」「評論」「小説」「古文」の配列とし、100点の配点、60分の問題とした。
- (2) 出題範囲と問題構成は、受験者が学んだ基礎的かつ基本的な力が反映されるよう配慮した。受験者の思考過程に沿った設問及び設問形式となるように構成し、各設問の難易度のバランスを考え、識別力のある問題となるよう留意した。
- (3) 問題文や設問及び選択肢の吟味には、上記の学力を問うものとなるよう細心の注意を払うとともに、リード文や注は受験者の理解の一助となるよう工夫した。

各問題について

□ 『国語便覧』を主な素材として、基本的な知識を網羅的に問うた。1つの設問で、なるべく多くの知識が確認できるよう、出題に工夫を凝らした。普段からどれだけ国語に興味をもって取り組んでいるかという受験生の学習姿勢が間接的に表れるのではないかと考える。

問一 著名な古典作品のうち、男性筆者の作品を答える問題。文学史における知識の正確さを確認している。

問二 詩歌における比喩の理解を問うた問題。比喩に関する基礎的な知識を確認している。

問三 四字熟語に関する正確な知識を問うた。語彙力は文章を読解する上での基礎体力となると考える。

問四 慣用句に関する知識を踏まえた洞察力を確認している。

問五 基本的な古語に関する基本的な知識を確認している。

問六 敬語表現に関する知識を確認している。一問一答の知識ではなく、例文に基づく、具体的な文脈に即した活用力を確認している。

問七 国文法における係り受けの理解を問うた。高等学校での古文学習につながる重要な視点が定着しているかどうかを確認している。

問八 故事成語に関する知識を踏まえつつ、間接的には漢字の知識を併せて問うている。

□ 事実に基づく意見の重要性に触れた上で、例外として意見自体の独自性や、発言者やその言動といった、発言の根拠となる事実以外のところに価値を見出す場合について言及された文章。事実を軽視する風潮を表す言葉として「ポストトゥルース」という言葉が取りざたされた背景を踏まえ、現代における言葉のありようについて言及された示唆に富む文章だと判断し、出題した。

出典 烏賀陽弘道『フェイクニュースの見分け方』（新潮新書）

問一 文脈を踏まえ、空欄に入る適切な接続語を選ぶ問題。受験生の論理的思考を確認している。

問二 導入部の理解を問うた問題。「どういうことか」ではなく「どういうことを言おうとしているのか」と問うことによって、傍線部の単純な言い換えではなく、意図するところを汲み取り、的確に理解できているかどうかを確認している。主題理解を深めつつ、論旨展開に受験者を引き入れるための導入問題でもあった。

問三 空欄にあてはまる内容を識別する問題。前後の内容を踏まえた、堅実な文脈力を確認している。設問を（一）と（二）に分割することによって、より正確な理解を反映できる問題になったのではないかと考える。

問四 指示内容を含む語彙についての理解を問うた。指示内容を含む語については、対応関係を踏まえつつ、慎重に理解できているかどうかを確認するため、あえて紛らわしい選択肢を設けた。

問五 傍線部の内容理解を問うた。並立を表す助詞「も」が何を意味するのかを正確に把握した上で、傍線部の意味するところを理解することによって正答を得ることが

できる。複数の意図を踏まえた多重設問となった。

問六 傍線部の内容理解を問うた。解答内容が一部、本文内容に基づく類推内容を含むため、問い方を「どういうものだと考えられますか」とした。

問七 本文結論部の内容理解を問うた。二重傍線部が、どういう本文内容に関する具体的説明なのかがより明らかになるよう、選択肢の内容を吟味し、受験生の内容理解を深める説明を心掛けた。

問八

- (一) 傍線部と、その理由にあたる部分を適切に関連づけることができるかどうかを確認している。
- (二) 新入試を意識し、本文内容が適切に理解できているかどうかを、異なる文脈で具体的に記述させる問題。解答は複数を想定している。

問九 漢字に関する問題。漢字の知識に加え、間接的には文脈力を問うている。

☐ 1942年12月8日の真珠湾攻撃の直後、筆者とされる「僕」が知人のいる国府津に訪れた日の出来事を記した身辺雑記の一節。12月8日について記された文学作品としては太宰治「十二月八日」があるが、本作では、戦時中の血縁を重視する「墓」ではなく、対比的に取り上げられている「土器」に焦点化した書きぶりに高い批評性が認められるとして、日本文学研究において高く評価されている。設問は、人物像や心情把握を中心に出題した。

出典 坂口安吾「真珠」

問一 語彙に関する正確な理解を確認した。間接的には、日頃から国語辞書を引く学習姿勢が身についているかどうかを確認している。

問二 作品中、最初の登場人物「ガランドウ」の人物像についての理解を問うた。「足が速い」という表現が、前後関係からどのような意味を持つのかについて確認している。作品世界に円滑に受験生を招き入れるための導入問題でもあった。

問三 傍線部における「新仏」の意味について、前後関係を手がかりに適切に理解できているかどうかを確認している。内容の不明な箇所について、その部分にのみこだわって意味を想像するのではなく、前後関係から慎重に該当箇所を類推することができるかどうかを試す問題である。

問四 登場人物の発言意図に関する問題。傍線部の字句通りの意味ではなく、含意する

意味を理解できているかどうかを確認するため、「どういうことを言おうとしているのですか」と設問文を工夫した。

問五 登場人物の行動と心情との結びつきを確認している。小説読解における基本的な理解について確認している。

問六 主人公「僕」の人物像についての理解を確認している。また間接的には作品終盤の場面理解を併せて問うている。

問七 新入試を視野に、素材文とは別の文献と比較・参照させながら、本文内容を理解する問題。多様な読みを可能にするための、具体的根拠を適切に指摘できるかどうかを試している。

四 能「隅田川」の結末部より出題。さらわれたわが子を捜すも、子はすでに亡くなっており、明け方、荒れ果てた塚だけがその場に残されていたという母親の悲嘆が描かれている。描かれている内容は現代人にも共感できるものであり、古文を読む上での単語力や文法力はさておき、古典作品の面白さを受験生に紹介したい意味合いもあって、この素材文を出題した。

出典 「隅田川」

問一 波線部の活用形を確認している。前後関係の文脈力も間接的に問うている。

問二

(一) 「母」の心情を踏まえた、和歌の大意を確認している。

(二) 文脈を丁寧に押さえる、論理的思考力を試している。

問三 例年出題している現代仮名遣いに改める問題である。

問四・七

現代語訳を提示し、その訳になるような古語を補充する問題。設問箇所は、現代語にも面影を残しているものとした。現代語の豊かな語彙力も間接的に確認できるのではないかと考える。

問五 係り結びに関する基礎的な知識を確認している。

問六 古文学習においては「序詞」の学習内容にあたるが、受験生の取り組みやすさを考慮し、選択肢の中で正答が得られるよう配慮した。傍線部内の慎重な理解が解答に反映されるのではないかと考える。

問八 物語終盤の内容理解を整理し、深めるための問題。傍線部前の「塚」の意味を正確に理解することができたかどうかを確認している。

問九 古典作品と古典芸能との関わりから、文章がどのように演じられるかという、表現活動の観点から本問題を作問した。物語結末部の母親の心情理解に加え、能の基礎的な理解も間接的に確認することができるのではないかと考える。